
魔法学校エルセント学園の不思議姫

森崎優嘉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法学校エルセント学園の不思議姫

【Nコード】

N7501S

【作者名】

森崎優嘉

【あらすじ】

魔法学校エルセント学園。この学園には色々な噂がある、その一つ、『この学園には不思議な姫がいる』この物語は噂好き公爵令嬢ルルーが不思議な姫と出会おうとがんばる話。そして、出会った瞬間から平凡な日常は無くなっていた。

新たな戦争が始まりルルーはそれに巻き込まれてしまった。彼女の平凡な日常は取り戻せるのか。

登場人物（前書き）

ネタバレ注意です。

登場人物

ルルー・ダリア・ビレーシオ（14）

主人公。噂好きでいつも明るく元気。だがたまに大人びる事も。クラスは2年A組。それでもビレーシオ公爵令嬢である。

エレナ・ルドル・ラリオ（14）

ルルーの幼馴染。しっかり者でラリオ公爵令嬢。言葉遣いもお嬢様。クラスはルルーと同じく2年A組。

マリア・アルセーヌ（14）

ルルー、エレナの親友。庶民出身だが結構頭も良く、姿も綺麗。ルルー、エレナとは小等部から知り合った。

ティア・オルエール（14）

本名は、ティア・エルオッド・クエール・エルセント。正真正銘のエルセント王国の第2王女。

ただ王女としては表には出ないのでほとんどの人には知られていない。

クラスは2年A組。また、噂の張本人。

エリエル・オズ・スクワード（15）

表向きは『王子候補』だが、裏はティアの婚約者。
クラスは3年A組。
兄と弟、1人ずついる。

ユアン・ロル・クエール・エルセント（16）

エルセント王国の第2王子。そしてティアの兄。
クラスは、高等部1年A組。

ルーク・リオル・クエール・エルセント（？）

歳は不明だが30代くらい。
エルセント王国の国王。
過去の事でティアを心配している。

リンク・ブエス・ルイロス（？）

ルークと同じく30代くらい。ルークとは学生時代の親友。
魔法学校エルセント学園と学園長。

登場人物（後書き）

まだまだ出てくる予定です。

初めまして！（前書き）

初投稿です。間違いなどがありましたらどんどん言ってください。

初めまして！

魔法学校エルセント学園。この学園には不思議な姫がいるという…
姫は誰とも喋らない、故に友達、親友もない、ずっとずっと1人。
初めまして！私の名前はルルー・ダリア・ビレーシオ。噂話がすつ
くごく好きなの！

これでも一応公爵家の娘なんだからね！？失礼な事をするとお父様
に言うからね！

…なんてね 私はやさしい…から大丈夫大丈夫！…信じていないで
しょう…いいわよ。これから私が話してあげるから…これから私が
話すのは私、ルルー・ダリア・ビレーシオと不思議な姫との出会い
の話よ…。

初めまして！（後書き）

只今、キャラクター考えにがんばっております。
なるべくたくさんの人を登場させたいと思います。

元気な3人（前書き）

ルルーの友達が登場してきます

元気な3人

キンコン…。学校のチャイムが鳴った。さっきまで静かだった教室がいつせいに賑やかになった。

「終わった〜！」

ルルーはぐったりしていた。今日は朝から色々大変だったのだ。

「ルルー、まだ授業があるわよ？」

茶色で長い髪をなびかせながら1人の少女はルルーに近づいた。彼女の名前はエレナ・ルドル・ラリオー。ルルーと同じく公爵家であるラルロー公爵の令嬢。その関係もあって2人は幼馴染だった。

「え〜！？やだ〜！」

「次で終わるのだから我慢なさい！」

わーわーと騒ぐルルーにエレナはルルーの頬を引っ張った。

「いひやいいひやい！」

ルルーは一生懸命抵抗するが、エレナ相手じゃ無理だった。だがそこで、もう1人の少女が声を掛けた。

「エレナちゃん、ルルーが痛そうよ？もう許してあげたら？」

声を掛けたのはマリア・アルセーヌ。2人の様に幼馴染ではないが小等部からの親友だ。

ルルーたちは中等部の2年生。エルセント学園は小等部、中等部、高等部がある。小等部は全6学年で中等部、高等部は全3学年ある。クラスは、A組、B組、C組、D組とあり、魔法力や頭能力が高いほどA、B組あたりのトップクラスになる。（ルルー、エレナ、マリアは3人ともA組。）

「…今日はこれで許しましょう。」

エレナはルルーの頬を引っ張る事のやめた。ルルーは涙目で赤くなつた頬をさすっていた。

「もう…エレナちゃんも悪いけど、ルルーもだよ？ちゃんと我慢しない、ね？」

マリアはまだ頬をさすっていたルルーの頭を撫でた。

「うう…分かった、がんばる」

「なんかマリアと私との扱いがちがう様な気がするんですけど……」

「大丈夫だよエレナちゃん、ルルーはしっかりエレナちゃんの事を大事に思ってるよ？」

マリアの言葉を聴いたとたんエレナは顔を真っ赤にしながら俯いた。ルルーはマリアとエレナとの会話をニコニコとしながら聞いていた。その後ルルーは無事に最後の授業が終わるまで我慢をしていた。

ルルーたちが話していたころ、1人の少女が席を立ち、教室を出て行った。彼女の名前はティア・オルエール。彼女と3人が向き会える日はもうちょっと後のお話。

元気な3人（後書き）

やっとヒロイン4人の名前が出てきました。

ティアはこの話全体の鍵を握っています。

これからもがんばって、なるべく連続投稿めざしたいです。

暗闇

ここには何もない。光もない。ずっと真っ暗。そんな部屋の中には1人の少女がいた。暗闇の部屋の中、蠟燭1本を頼りに本を読んでいる。少女は言う。

『いつになったらこの闇の部屋から出られるのだろう、いつになったら私は光を見られるのだろうか…』

少女は言う。毎日言う。彼女が光に触れるその日まで。

ある日彼女に1人の少年がやって来た。少年は彼女の兄だと言う。

『我が妹よ、お前はここから出たいか。』

少年…兄は妹に問う。

『出れたら出たい、光というものをこの身で実感したい…だがね我が兄よ、出たいのに出たくない自分がある…この矛盾した気持ちはどうしたらいいのだろうか…』

兄は妹の言葉を黙って聞いている。そして思った、妹は壊れかけているんだと…

『私もついに、壊れる時が来たか。』

『妹よ、確かにお前は壊れかけている、だがな妹よお前は俺の愛しい存在なのだよ。決してお前を壊させない。』

兄と妹は見詰め合った。そして妹は微笑んだ。

『兄よ、あなたは変わったんですね、今のあなたなら信じられる』

兄も微笑んだ。

『さあ行こう、お前の求めている未来へ！』

兄は妹に手を出した。そして妹はその手をゆっくり握った。

『はい、行きましよう求めていた未来へ！』

2人はゆっくり歩きだした。

当時、兄は9歳、妹は5歳だったという。

暗闇（後書き）

光もない、ただ闇だけ。そんな毎日を通り過ぎたらきっと人は狂ってしまう、壊れてしまう。人形のように…生きている人形のように…
って感じに思っていました（笑）

噂（前書き）

おそくなってスイマセン

噂

「…それでね、何人かそのお姫様を見たんだって」

「ふえーそうなの！いい噂ありがとう！」

ルルーは今日も1つの噂を聞いた、それは最近みんなが見たという人、『この学園には不思議な姫がいる』という噂それは今まで何回も耳にした噂。それに見たという人も少なくはない。だがルルーはその情報は信用できなかった。ルルーは公爵令嬢、王族も親戚にあたるのでほとんどの情報は分かるはずなのだ、しかしこの、エルセント学園に『姫』がいるなんて聞いたことがなかった。

この学園には『姫』はいない、だが王位継承権第7位の『王子』と国王ルークの実の弟、ルクアのスクワード家の次男であり『王子候補』がいる。この2人だけが王族直属だった。

だからルルーは『姫』が信用できなかった。

「ルルー、どうかしたの？」

エレナがルルーらしくない様子に心配そうに声を掛けた。

「なにもないよ、ただ本当に『姫』は居るのかなって」

「まあ…確かにねこの学園には王族直属の2人とその親戚にあたるルルー1人だものね」

2人が黙っていると、ずっと何も言わずに側にいた MARIA が口を開いた。

「そういう時は直接聞いてみるのが1番だよ！」

元気良く言った MARIA にエレナとルルーは驚いた顔をした。

「…でも聞くって誰に？」

エレナが質問すると MARIA はフツツと言いきれから…

「王子候補のエリエル様に聞くのよ」

あまりにあっさりと答えた MARIA に、2人は

「え~~~~~!!」

思わず教室中が静まるほど大きな声をだしてしまった。
そんな2人をマリアは微笑んでいた。

噂（後書き）

ふぁー やつとかけました！

先輩の秘密（前書き）

王子候補、エリエル君登場！

先輩の秘密

「うゝなんか緊張してきた…」

「そうね…」

「私もです」

3人は『王子候補』エリエル・オズ・スクワードに会いに彼がいる3年A組の教室に行くため廊下を歩いている。

「エリエル様ってどんな人だったけ？」

ルルーは1人呟いていた。そして3人は3年A組の教室の前に来た。「ここが3年A組の教室ね」

エレナも緊張しているらしい。

「…なんか声を掛けずらいですね…」

マリアの言うとおりだとルルーは思った。

「君達、そこで何立ってるの？」

3人は声をした方を向いたそしてエレナとマリアは驚いていた。ルルーは？の顔を浮かべている。

「「エリエル様！」」

（この人がエリエル様！…確かに見覚えがあるような…）

驚いた様子の2人にルルーは1人だけ心の中で確信した。

「で、君達は何をしているの？」

驚いた2人の顔をおもしろそうに見ながらその顔をルルーへと向けた。それにびつくりしたルルーは、あわてながらも事情を話した。

「そうか、それで君達はその噂の真相を暴きに來たんだね。確かにビレーシオ公爵令嬢ならば疑問を持ってもおかしくないか…」

4人は屋上にいた。教室の前ではやめたほうがいいというエリエルの提案だ。

「はい。それで本当に姫はいるのですか？」

ルルーがエリエルに問うとエリエルは何か小さく呟っていた。

「…でも彼女は出てくるかどうか…」

「あの…エリエル様？」

「ルルーはいきなり何か呟きだしたエリエルに心配そうに声をかけた。『ああ、大丈夫。質問の答えはね…』いるよ』」

「あまりにもあつさりと答えたエリエルに3人は言葉が見つからなかった。そしてやっとマリアが口を開いた。

「本当に居るのですしたらそれは誰なのですか？この国の姫なのですか？」

エリエルは苦笑いを浮かべた。

「そうだよ、この国の姫だよ。僕の方から名前は言えないけど…彼女は昼休みに毎日図書館にいるよ、それが僕からのヒント」

3人は顔を見合した。

「エリエル様ありがとうございます!!」

「どういたしまして、3人ともがんばってね」

そして3人は不思議姫に会いに図書館へいそいだ。その頼もしい3人の背中を見つめていたエリエルが後ろに振り向いた。

「どうする？ティア、3人が会いに行くみたいだけど」

そこにはティアがいた。ティアはスツと目を細めた。

「私が噂の不思議姫だというのはならば、それはしかたの無いこと…ふつうに彼女達と会うわよ…ただ、そこに隠された真実を分からないようにさせる、それだよ」

そう言った彼女にエリエルは、

「確かに…彼女達を巻き込んではいけないしね、ティアも気を付けてね」

そう言って笑ったエリエルにティアは

「そうね、エリエルも気を付けて、…お父様達にも伝えないとね」
そう言って笑った。

今日の空は青空だった。こんな生活がずっと続きます様に、そうティアは願った。

先輩の秘密（後書き）

エリエル&ティアのコンビは好きです！

さて3人のティアの出会いはどうなるのでしょうか！

出会い

「図書館って1度も行ったことないけど…」

3人は上を向いた。そこには何階あるのか不明なほど本がたくさんあった。

「行ってみましょう。」

「行くって？」

マリアがエレナに問うとエレナは上を指差した。

ええ！！と叫んだマリアを無視してエレナは階段をのぼりはじめた。その後ろをマリアとルルーが付いて行く。

（もうすぐ、会えるんだ…）

ルルーは階段をのぼりながら思った。

3人は、1番上から2番目の階に着いた。あと数段階段を登れば不思議姫がいると思われる最上の階に着く。

「準備はいい？」

ルルーはエレナとマリアの顔を見た。

「ええ、私は準備いいですわよ。」

「私もOKです。」

2人の確認をしたルルーはゆっくり階段を登った。

「わあ…」

ルルーが見た物、それは豪華な物であった。そこには植物園があった。植物に囲まれている真ん中には机と椅子が置いてあった。

「これは…」

「植物園？」

エレナとマリアも驚いていた。そしてルルーは気が付いた。

（不思議姫は？）

そこには誰1人人がいなかった。机と椅子は確かに誰かが使ってい

る感じだった。3人は真ん中にある机と椅子に近づいた。

「ねえ、誰も居ないよ？」

マリアは周りを見渡した。エレナとルルーも周りを見回したが3人以外誰1人いなかった。

（噂は嘘だったのかなあ…）

ルルーがそう思っていると思われ、後ろから声をかけられた。

「あら、ここまでたどりつけるなんて結構体力あるのね」

3人に声をかけてきたのは…

「オルエールさん！？」

「…ティアでいいわよ」

マリアが驚いているとティアは苦笑いを浮かべた。

「あの…ティアさんが噂の不思議姫なんですか？」

ルルーは、いつもより真剣な表情で（いつもはそんなに真剣な表情はしないが…）ティアに聞いた。

「ええ、そうよ。」

あまりにもあつさりした答えに3人は固まってしまった。だがルルーは聞いた。

「あなたは『姫』なんですか？仮に『姫だとしてもどこの『姫』なんですか？」

ここからはルルーとティア、2人の戦いになった。エレナとマリアは大人しくただ聞いているだけだった。

「私は…この、エルセント王国の『姫』よ。オルエールという名前は私の父でもあり、この国の国王でもある人が私のためにオルエール公爵と話し合ってオルエール公爵の娘としてこの学園に入ったのよ。私の本命は、ティア・エルオッド・クエール・エルセントなの。」

本当の事を話したティアは目を閉じた。そして沈黙が訪れた。だがその沈黙を破ったのはエレナだった。

「でも…どうして偽名を使ってこの学園に入ってきたのです？」

ティアは美しくも悲しい笑顔になった。それには3人とも見惚れて

いた。

「それはね…この国全体に関わる事なの、だから話せない…でもいつか、近い日に…話すときが絶対来る。すべてはその時に話す。私の正体を着きとめたルルー、エレナ、マリア…あなた達3人に。」
ルルーはその時思った。王族、国、大きなそれを背負っているのにこんなに毎日楽しく過ごしている。これがティアなのかそれとも・
・ルルーは考えるのをやめた。今は…今だけはこうやって楽しく過ごそう。それがずっと続くと願って。

出会い（後書き）

ついに3人とティアがで会いました！

大きな嵐（前書き）

今回はルルーとティアしか出てきません。

大きな嵐

ルルーは廊下を歩いていった。

（ティアさんが不思議姫…この、エルセント王国の姫…）

ルルーはずっとティアと出会った時の事を考えていた。『近い日に話す時が来る』ティアのその言葉にルルーは頭を悩まされていた。

「図書館…行ってみようかな」

ルルーは図書館へ歩いた。

ルルーが図書館に着き、1番上の階に行くとティアが植物に囲まれている椅子に座って本を読んでいた。ティアはルルーに気付き、本を閉じた。

「今日は1人なのね」

「うん…2人とも急がしそうで…」

ルルーはティアに手招きされ、向かい側の席に座りティアと向き合う様になたちになった。

「それで、私に何か言いたいことがあるんでしょう？」

だがルルーはティアの言葉に首を振った。

「…ちがうの…自分でも分からない、どうしてここに来たのかも」

ティアは目を閉じながら聞いていた。そして目を開けると微笑んだ。

「そう…私と同じね…」

「え？…」

ルルーは呆気ない顔をした。ティアは少し笑った。

「…そうね、私と似ているあなただったら言ってもいいのかもしれない…」

「ティアさ「さんはつけなくてもいいわよ」…ティア？」

ティアに言われたので「さん」はつけないことにした。

「ルルー、あなただけに話すわ…昨日の話覚えてる？」

昨日とはルルーたちとティアが初めて会った日、話せないと言って

分からなかった話。

「うん」

「その話を今からするわ、だけどこの話は他の人には話しては駄目。約束して？」

『他の人には話しては駄目』そんな話をするのだ、ルルーはまっすぐティアの顔を見た。

「約束する。絶対他の人には言わない、例えばエレナやマリアでも」

ティアはルルーの言葉に微笑んだ。

大きな嵐（後書き）

書いているだけでもドキドキします！

ルルーとティアとの秘密

今から9年前当時ティアは5歳だった。ティアは暗闇の部屋にいた。その部屋には光もない、何もない、そんな部屋にティアだけがいた。「お母様？どこにいるの？」

ティアは呟いた。だが誰一人声はしなかった。

「寒いよ、寂しいよ、ねえ…誰かあ…」

ティアの声は暗闇の部屋に響いた。

「私は何かしてしまったの！？ねえ誰か！誰か！教えてよお！！！」
ティアは叫んだ狂ったように叫んだ。

ある時、男がやってきた。彼はこう言った。「お前にはこの国を絶望させる力がある。それを知った国王がお前をこの部屋に入れろとご命令したのだ」男の言葉にティアは絶望した。そして恨んだ。国王でもあり父でもある人を。

あれからいつ日かたった。もう何日かも分からなかった。この日は前とは違う男が来た。男の手には1本の蠟燭と数冊の本を持っていた。男は蠟燭を置き、火をつけてから本をティアに渡した。それから何も言わずに男は出て行った。ティアはそれからずっと本を読み続けた。色々な本があった。絵本や小説、ファンタジーなど色々あった。ある1冊の本には紙が挟まれていた。ティアがそれを読むと涙が溢れた。母からの手紙だった。

『愛しいティアへ

暗闇の部屋に入れてしまっただけ私もお父様も後悔しています。ティア、本当にごめんなさい、本当に、本当にごめんなさい。アレク達も悲しんでいるわ…でも、もうすぐもうすぐ貴方を助けられるかもしれないの、アレク、キアラ、そしてユアンがね？ティアのためにお父様を説得させてるの。だから、

もう少しの辛抱よ。』

手紙にはそう書かれていた。

「お母様」

ティアは涙を拭った。そして決意した。みんなが迎えに来てくれるまでがんばろうと。

そしてその時は来た。1人の少年が来た。

「ティア」

少年は優しい声でティアの名前を言った。ティアは顔を上げた、ティアは少年の顔を見たとき涙が溢れた。

「アレク様！」

ティアは少年にアレクに抱きついた。アレクもそんなティアにやさしく抱いた。

「迎えに来たよ、ティア」

「遅いですアレク様」

そしてティアはやっと外へ出られることができた。母はティアを見たとたん泣き出しティアを優しく、強く抱きしめた。

「ティア、お帰り」

「ただいま、お母様」

そして近くにいたキアラ、ユアンもティアに抱きついた。そんな光景を父は複雑で悲しい表情で見ている。ティアは父を見た。父もティアを見た。

「すまなかったティア。本当にすまなかった！」

涙ながらに誤った父にティアは抱きついた。

「お父様！確かに最初はお父様を恨みました。今もまだ少し信用できません。ですが！こうして私のために泣いてくださるのだったら許します！私はあなたを許します！私の大好きなお父様でいるために！」

そして2人は抱き合った。2度とこの心が消えないように。

「……」

ルルーは自分の涙が溢れていることに気付き素早く涙を拭った。

「…この国を絶望させる力…それがなんなのか私自身も分からないの、だからこの話は誰も言っではいけなかった。だから本当に他言は禁止」

「うん…分かってる。ねえ、もうティアは1人じゃないんだよ？私がいる。だからもう…1人じゃないからね？」

その言葉にティアは初めて涙を見せた。

「…うん。もう、私は1人なんかじゃないんだルルーだっている、エリエルもいる」

「エレナやマリアもいる」

そして2人は笑いあった。この大切な時間が続くと願いながら。

今日はいつもの特別な日、この時2人はそう思った。

ルルーとティアとの秘密（後書き）

今回はいつもより少し長いと思います。
まだまだ続きますよ～

嵐がやってきた

その日は良い天気だった。

ルルーはエレナ、マリア、そしてなんとティアと4人で今起きた事件について話していた。

その事件とは…。

それは朝のホームルームの時間に起きた。それはいきなりルルー達の担任、リーナ・スフィク・ルイロスが言ったことだった。

「今日、国王陛下がこの学園に来られます。みなさん、国王の前では決して無礼な行動をしないでくださいね？」

まんべんな笑みを浮かべたリーナに教室中が固まった。そんな中ルルーがティアの顔を見てみると、ティアは目を細めて完璧に怒っていた。

それが事件だった。

「…なんかすつごくいきなりだね…」

マリアは庶民の出なので王族とは無縁、国王が来るということは一大事だった。

「マリアの言うとおりですわ、さすがにいきなりすぎよ!」

マリアとエレナで愚痴を言っている間、ルルーとティアは顔を見合わせていた。

「…いきなりどうしたんだろうね？」

「…私も知らない…なぜ急に…」

ティアも、ティアの過去を知っているルルーもなぜ国王がこの学園に来るのが分からなかった。

そんな話を話しているとき担任のリーナがティアとルルーに近づいてきた。

「オルエールさん、学園長がお呼びになっているわ」

その言葉にティアの体が震えた。

「…はい、分かりました。…今行きます」

リーナは頷いて教室から出て行った。

ルルーはティアの顔を見た。

「ティア…」

「…大丈夫、きっと朝のことね、ルルー、そんな顔しないで？」

ティアはルルーの頭を撫でた。

「…分かった、何かあったらすぐに言ってね？」

ティアは力強く頷いた。そして「行ってくる」と言い、教室を出た。

まだルルーは不安だったが大丈夫、大丈夫と思った。

「なんで呼ばれなのかなあ？」

「さあ？」

エレナとマリアはルルーを見た。

「さあ…私も分からない…」

ルルーはそう答えておいた。

ティアは学園長室の前にいた。

(……………)

そしてティアは静かに扉と叩いた。中から「入って」と短い返事があったのでティアは「失礼します」と言い扉を開けた。そこには学園長の他、エリエルに『王子』でありティアの実の兄ユアンがいた。

「全員そろったね？」

学園長が3人を見た。そして頷き本題に入った。

「今日、皆さんに集まってもらったのはホームルームに各担任から聞いたことについてです。」

「学園長、どうして父上はいきなり学園に来るのですか。朝は何も言っていないませんでした。」

ユアンは学園長に問う。ユアンは城の宮殿から直接学園に通っている。朝の食事全員で食べている。ティアは離れで暮らしている。

ため一緒に食事はしない。

「それは私にも分かりません…ただ行き成り学園に来る、ということになったんです。」

「ですが学園長、ユアン様もなにも分からなかったということは、国王自信の目的なのでは？」

エリエルも難しい顔をしている。

「そう…かもしれません。」

全員が沈黙していると、その沈黙を破ったのはさっきからずっと静かだったティアだった。

「…それで私たちは何をすればいいのですか？」

「ああ、皆さんには学園内を案内してもらいたいです…もちろん警護もかなて、ね。」

それには3人とも頷いた。だが、ティアはすぐに俯いた。

「ティア…」

エリエルもユアンもそんなティアも心配そうに見つめていた。

「ティア…大丈夫？」

ユアンは兄としてティアの心配していた。ティアは顔を上げ、少し悲しい笑顔を見せた。

「大丈夫です…ユアン兄様。」

学園長は満足げに

「では皆さん、よろしくお願いします」

そう言って万遍な笑みを浮かべた。

嵐がやってきた（後書き）

まんべんな笑み…

一応学園長は男です。

国王ルーク

エルセント学園の前には3人の人物が学園長に向かって歩いていた。
「お待ちしておりました、陛下。」

学園長が挨拶をすると真ん中に居た男、エルセント王国の国王ルークが前に出た。

「突然の訪問すまない。」

「そんな事で謝罪をしないでいただきたい。親友の身として謝られても困ります。」

笑顔で答えた学園長にルークは少し楽しげに

「いつたつても変わらないなリンク。」

「それはあなたもでしょう？」

そう言つて学園長：リンクは少しいじわるな笑みになった。

ルークとリンクは学園長室に向かって歩いていった。

「我が息子たちはどうだ？」

「ユアン様は親しき友人もたくさんいてクラスの人気者です。成績もダントツ1位ですよ…誰かさんに似て。」

ルークはリンクの《誰かさん》に眉を寄せたがそれは一瞬の事だった。

「そうか…ティアはどうしている。」

ルークは1番心配しているティアについてリンクに聞いてみた。リンクは微笑んだ。

「ティア様はですね、最近3人の女子生徒と共に行動しています。笑顔も見られる様になりましたから。すごく楽しそうでしたよ。よかったですね陛下。」

リンクの言葉にルークも笑顔になった。

「ああ。よかったよ…ティアも、あの時の記憶の傷が治ってきたん

だな…」

そして2人は学園長室の前に来た。

「中で、ユアン様、エリエル様、そしてティア様が待っています。」
ルークは驚いた。前に学園に来たときは息子のユアンとまだ在校していた娘のキアラ、そして姪のエリエルがいてティアは来ていなかったのだ。

そしてリンクが扉を開けると3人の人物が並んでいた。左からエリエル、ユアン、ティアの順で並んでいた。扉が閉まったのを見てユアンが前に1歩で出た。

「お待ちしていましたが父上。ですがはつきり言ってますごく怒ってます。」

ルークは苦笑いをした。ユアンの顔は本当に怒っていたからだった。横にいるエリエルやリンクも苦笑いをしていた。だが、ティアだけは無表情のままだった。

「まだ授業も始まらないので陛下は少々ここで待つてもらいます。ユアン様もエリエル様も準備がありますし、私も色々あるので一緒にできませんが…ティア様お願いしてもいいですか？」

「…はい、分かりました。」

ティアの答えにリンクは笑顔になった。

「ではお願いします」

そう言って部屋を出た。学園長室にはルークとティアの2人だけになった。

「ティア、座りなさい」

ティアは静かに座った。そして顔を会わせる感じになった。

「…久しぶりだな、ティア」

「お久しぶりです…お父様」

ルークはいつの間にか笑っていた。それにティアは不思議そうな顔をした。

「何故笑っているのですか？…気持ち悪いです…」

「ハハハ、何故か面白くてね。…こうやって2人で話すなんてな

かったからな」

その言葉にティアは固まった。

「…そうですね…確か…に…確かに、初めてですね2人で話すなんて」

「ティア…そんな顔をしないでくれ、お前のそんな顔はもう見たくない…笑ってくれ…」

ルークをティアを抱いた。そして王族の印であるグリーン系の色の髪を撫でた。ティアは目を閉じた。

「…そうですね、私も笑わないといけませんね」

そう言つてルークに笑顔を見せた。ルークも最初は驚いていたが最後は2人で笑い合うことができた。

このティアの笑顔を壊さないように、何日もかけて修復したこの絆を絶対に、再び闇に落とさない。

そう、ルークは誓った。

国王ルーク（後書き）

最後は父と娘で終わらせました。
やっぱり親子は仲良しが一番！

親子（前書き）

ユアン少し可愛いです…

親子

「父上！どうして急にいらしたのですか！」

あれからユアンとエリエルも準備が終わり学園長室に来た。（リンクはまだだった。）

ユアンの言葉にルークは苦笑いをするだけだった。側には、少し苦笑いしているエリエルとつまらなそうな顔をしているティアがいた。「色々あつてね…急に来てしまつて本当にすまないと思っている。」ルークの言葉にユアンは少し冷静になった。

「…今度はしっかり言つてくださいね？」

ユアンの言葉にルークは笑顔になった。その笑顔の顔を見たティアが少し退いた。

「…うわ…お父様つてふえんふあい。」

「…ティア、それは言つては駄目だぞ。」

もうすぐで凄い言葉を言いそうになったティアの口をエリエルは塞いだ。

「ふあふいほふえ、ぷは…だつて本当の事じゃない。」

「まあ…そうだけど…」

ティアとエリエルはルークを見た。そこにはユアンが怒っている姿をルークは笑顔で見っていた。

そして2人はため息をついた。

「ん？2人は何ため息なんかついているんだ？」

ルークと問いにティアとエリエルは顔を見合わせて頷きあい、そしてはつきりと言った。

「叔父上」「お父様」

「…しっかりこの国の国王としてしっかりしてください。」
「…うっとルークは反省した。その姿を見たユアンは1人大爆笑していた。」

そしてリンクも準備が終わり帰って来た。
「さて、そろつと見学に行きましょう」
そして5人は学園長室を出た。

親子（後書き）

今日は短めです。

次回から本格的に見学のことになります。

見学

「今日見学していただくクラスはティア様のクラスである2年A組になります。」

リンク達は廊下を歩いていった。

「確か…魔術の授業だったはず。」

ティアは思い出した様に言った。

魔術の授業は、魔術の授業の為に作られた所でやる。通称『魔術の塔』。塔といってもただ広いだけであった。

「丁度いいな。皆の実力をを見せて貰おう。」

その言葉にユアン、エリエル、ティアの3人は固まった。

「…父上、またスカウトしないでくださいよ?」

「もう十分に人は足りてますからね叔父上…」

「…もうこれ以上見たくない…」

ユアンとエリエルはルークをおもいつき睨んだ。ティアは少し虚つな目でルークを見た。

「…分かっているさ…」

その光景をリンクは笑いながら見ていた。

そんな会話をしている頃、これからルークたちが行く2年A組の生徒たちは大変なことになっていた。

「どうでしょう!?こ、国王陛下がきますわ!?」

「緊張するー!」

「失敗したら…」

魔術の塔ではにぎやかだった。ルルーたちも少し緊張気味だった。

「ううゝ緊張するゝ」

「私ものですわ…」

「ん…」

少し変な感じのルルーにエレナとマリアは顔を見合わせた。

ルルーはティアの事を考えていた。ティアの過去…そして急な国王でありティアの父親であるルークの訪問。ティアもルルーにとっても驚きだった。

ずつと黙り込んでいるルルーをエレナとマリアはなぜか声を掛けられずにいた。掛けようと思ってもなぜか声を掛けてはいけないうような不陰気がルルーからした。さすがは王族とは遠縁関係の公爵令嬢だな…とエレナは思った。

そして、ついに国王が魔術の塔へ来た。

「着きました。」

5人は魔術の塔へ着いた。そして中に入ると2年A組の生徒たちが魔術の練習をしていた。

ティアはルルー、エレナ、マリアの3人を見つけて少しほっとした。ティアが3人を見てみると、ルルーと目が合った。ルルーは少しほっとした表情になり、ティアに微笑んだ。ティアも釣られて微笑んだ。

そんな2人の様子をルークは見ていた。久しぶりに見るティアの笑顔、ティアに笑顔に戻してくれた彼女を見る。

ルークがルルーを見ているのに気がついたティアは、視線をルルーに向けたまま、

「彼女は、ルルー・ダリア・ビレーシオ。ビレーシオ公爵大臣の愛娘です」

「そうか、大きくなったのだな」

ルークは懐かしいと思った。

（そういえばダルトも父だったな…）

ルルーの父、ダルト・マージュ・リレーシオはルークとは昔からの親友だった。ルーク、ダルト、リンクの3人は有名な組み合わせだった。

「ティア、ルルーだったな彼女と少し話したいのだが」

ティアはリンクを見るとリンクは頷いた。

「はい。分かりました、呼びに行ってくるので少々待っててください」

そう行つてティアはルルーのもとへ行つた。そしてルルーは一瞬驚いた顔をしたがすぐに切り替えティアと共にルークのもとへと来た。
「…私はあまり覚えていないのですけど、お久しぶりです陛下。」
華麗なあいさつをしたルルーに

「そんなに硬くならんでいい。うむ、やはりダルトに似ておる」

「え？…あ、あの…」

「ん？ああそなたの父君とは親友なでな」

ルークの隣にリンクが来た。

「そうそう彼が結婚したときは驚きましたよ。あのダルトが結婚だなんて」

ルークとリンクが笑っているのを見てルルーは啞然としていた

（お父様つて陛下と学園長とは親友だったんだ…）

ルルーは改めて父の偉大さを知った。

「はあ…始まつた」

そんな声をした方を見るとユアン、エリエル、ティアが呆れた表情でため息を吐いていた。

「ルルー、なんか色々ゴメンね…」

「え？、ううん大丈夫…なんかすごいね」

改めてルルー達4人は2人を見た。そして4人が呆れた表情になった。

見学（後書き）

ルールの父、なんかすごそうです…

戦いの始まり

「きゃあああああああー!!」

魔術の塔からは沢山の悲鳴が上がった。

みんなが逃げ惑う中、1人の女子生徒は立ち尽くしていた。

「あつ……い……あ……てい……ティアー……!!」

女子生徒……ルルーは叫んだ。

悲劇。それは国王ルークが2年A組の見学をしている最中に起きた。まず、最初に異変に気付いたのはティアとルルーだった。

「?……」

「……?」

ティアとルルーは同時に空を見た。

「……ティア」

「ええ……何かがおかしい」

2人の様子にルーク、リンク、ユアン、エリエルは顔を見合わせた。

「!……これは……何!」

「狙いは?……」

そしてティアがルークの方を見た。見た瞬間ティアは動いた。

「お父様危ない!!」

ティアは勢いよくルークを押しした。

「!??」

ルークは急いでティアを見た。だがティアを見た瞬間ルークは驚きと共に絶望した。

ティアには鋭い刃物が刺さっていた。血が下に向かってたれて行き、水溜りと様になっていた。

「……ティア!??」

ユアンとエリエルも驚いていた。

「シア、リア！奴らを追いなさい！始末はまかせる！ルア！アリアを呼んできて！」

ティアの側から3体の陰が動いた。そしてティアはそれを見届けるとひざま付いた。

「ティア！しつかりしろ！」

「お父…様、お怪我は…」

「ああ大丈夫だ、ティア！しつかりしろ！」

リンクは急いで知らせに行き、ユアンは他の生徒たちを安全な場所へと避難させていた。

「ティア！」

ルルーは急いでティアの元へ来た。

「ごめんなさいティア！私、私…！気が付いていたのに！」

「ルルー…のせいじゃ…ないから」

そしてティアは笑った。そしてエリエルを見た。エリエルは頷いた。

「ティア、こっちは安心しろ。アクアもこっちに向かっていて、アリアも居るらしい」

その言葉にティアは頷いた。ティアの傷は治療魔法で治っていた。だが、まだ力も入らず少し弱っているためルークに抱かれていた。

「お父様…」

「こっちは私たちに任せてお前はゆっくり休め」

ティアは頷いた。

「ルルー…任せるわ」

そしてティアは瞼を閉じた。すう…と寝息が聞こえる。それを確認したルークはルルーを見た。

「ルルー、我々に協力してほしい」

「素早く察知できたルルーの力を借りたい」

ルークとエリエルに言われたルルーは頷いた。

「…分かりました。ティアにも任されましたから、少しでもお力になれば」

そして戦いは始まった。

戦いの始まり（後書き）

凄いことになりました。

国王たちの真実（前書き）

キアラちゃんの登場です

国王たちの真実

「ティアが怪我をしたですって!？」

「はい。ですが命に別状はないと」

「そう、よかった…」

ここは王宮。そこには17歳ぐらいの女性と、侍女がいた。

「もう、ユアンがいたのにどうして…」

彼女の名前は、キアラ・ルイト・クエール・エルセント。

エルセント王国第一王女であり、ユアンとティアの姉。

「ですが、ティア様は陛下をお守りしたという情報でございます。」

「そう…でも心配だわ!たとえあの血が流れているとしても!」

「キアラ様: 大丈夫ですよティア様は得にあの血が濃いお方、すぐに治りますよ」

「そうだといいのだけど…」

キアラは窓を見た。そこにはかすかにエルセント学園の屋根が見えた。

「んっ…」

ティアが目を開けると視界にはエリエルとルルーがいた。

「ティア! 具合はどう?」

ルルーが心配そうに聞いてきた。

「…もう大丈夫よ。ありがとうルルー、エリエルも」

エリエルは頷いた。

「ティア、奴を追っていたシアとリアから情報が来た。奴らは山奥

に逃げ込んだらしい…厄介だな」

ティアは起き上がるうとしたが中々力が入らず、ルルーに手伝ってもらった。

「ルルーにはこれからの戦いに協力することになった」

その言葉にティアは驚いた。

「私は…ずっと平和な暮らしをして行きたい。だから、私も協力したいの…平和な暮らしを続けて行くために」

ルルーは微笑んだ。天使のように…

ティアも微笑みながら頷いた。だがそれは一瞬だけだった。ティアは何かを決心したような顔になった。エリエルも分かっているようだった。

「…だったら話さなければいけないことがあるの…」

ルルーは2人の様子に首を傾けたがしつかり頷いた。

「今から話すのは、僕たち王族直系の真実だよ」

「王族の直系…」

「僕達、王族直系の秘密…といってもその秘密は陛下ではなく王妃とその子だけなんだけど。僕の父上は陛下の弟だけど、母上は王妃の姉なんだ、つまり僕の母上はティアの叔母にあたる人なんだ…秘密というのはね、僕達には2つの血が流れているんだ。」

「血？」

「そう、血。まあはつきり言えば僕達は人間の血とヴァンパイアの血が流れているんだ。」

「は？」

ルルーは呆気にとられていた。

（ヴァンパイア？ヴァンパイアって吸血鬼のことだよな？）

ルルーはティアを見た。ティアは複雑そうな表情をしていた。エリ

エルは苦笑いをした。

「…実は王妃と母上はヴァンパイアなんだ…だからティアの兄弟、それと僕の兄弟はヴァンパイアの血が流れているんだ。もちろん陛下も父上も人間だから人間の血もながれている。」

沈黙が訪れた。だが今まで口を開かなかったティアが口を開いた。

「…でも、ほとんどの人は人間の血が薄かった。でもなぜか私とエリエルだけがヴァンパイアの血が濃かったの…それを知ったお母様は私とエリエルを婚約者同士にしたの」

ルルーは静かに目を瞑った。そして目を開き微笑んだ。

「…たとえばヴァンパイアの血が流れていてもティアはティア、エリエル様はエリエル様だよ」

ティアとエリエルはルルーに釣られて微笑んだ。

（そう…たとえばティアがヴァンパイアだとしても親友なのには変わらないんだから…）

ルルーは心のなかでそう呟いた。

国王たちの真実（後書き）

意外な展開：

王宮（前書き）

遅れてすみませんでした。

王宮

「ティア、ルルー、まず王宮に行かないと…」

「そうね」

「え？王宮？」

なぜ？とルルーは思っていたが確かに今の状況なら王宮に行かないといけない。

「行こう」

そして3人は王宮に向かった。

その頃、王宮では暗殺者探索なのであわただしかった。

「陛下、暗殺者の目撃情報が入ったとのことです」

「うむ、情報を元にして奴を捕まえろ！」

「はっ！」

ルークの疲れもピークを足していた。

休憩をしても新たな情報が次々来るため休憩ができない状況だった。

「はあ…」

ルークが溜息をすると横から声がした。

「大丈夫ですか父上…」

「アレクか、そっちの方はどうだ」

「順調に進んでいます。それと、もうすぐティア達 comes そうです」

「ティアは大丈夫か？」

「無事みたいです。」

「そうか…」

ルークは自分の大切な娘が無事と聞いて少し安心した。

「ティアも、無理をしてくれましたね」

「まあいいではないか」

「誰に似たのでしょうか…」

ルークは息子の黒いオーラに逃げようとした。だがそれは無理だった。

「陛下、アレク様。ティア様とエリエル様、そしてルルー様がご到着しました。」

「うむ。ごくろうこの部屋に案内しろ。」

「かしこまりました」

部屋を出て行った大臣とルークの話を聞いていたルークは疑問に思った。

「父上ルルーという子は？」

「ああ、ビレーシオ大臣の娘だ、ティアとも親しい友人だ」

「友人…ティアも成長したのですね」

アレクが思い出すのはあの出来事…あれからアレクはティアの事を心配していた。

「成長したな…」

部屋の扉がノックされた。

「陛下、お連れしました」

「入れ」

そして大臣の後ろにティア、エリエル、ルルーがいた。

「大臣、ご苦労だった。下がってよい」

大臣は一礼をしてから部屋を出て行った。

「ティアも無事そうだな」

「お父様もお怪我がなく安心しました。」

「エリエルもルルーも無事でよかった」

「いえ、叔父上こそよかったです」

するとアレクがルークの横に来た。

「エリエル、ドウウラが心配していたぞ」
少し笑い気味にアレクが言った。

「……まずい」

エリエルの顔が真っ青になった。

「行つて来い」

ルークが苦笑いをしながら言った。

「…行つてきます」

エリエルは顔を真っ青にしながら部屋を出て行った。

「ルルーも、礼を言おう」

「あ、いえ…私も、気付いていたのに助けられなくてすみませんでした」

「そんな事気にするな」

「父上は簡単に死にませんから大丈夫ですよルルー殿」

アレクは万遍な笑みで言った。

「アレク兄様…」

ティアはそんな兄に呆れるしかなかった。

王宮（後書き）

やっと書けました。

ですが、私も学生なんであるんですよテストという物が！
テスト？なにそれおいしいの？

そんなわけで今週は無理そうです。
すみません。

ティアの意外な場面（前書き）

テストはもうとくに終わっていたのですが……
すみませんでした！

ティアの意外な場面

「アレク兄様…」

ティアが呆れているとアレクがティアの目の前に来た。

「ティア、ご苦労様。ティアのおかげでこっちも奴らを掴めそうだし…キアラが心配していたから後で会ってきなさい。」

そう言っただけで笑ったアレクに

「はい…後でキアラ姉様に会ってきますね」

少し笑ったティアにアレクは、ティアの頭に手を乗せて頷いた。

ルルーはそんな兄弟を優しく見守っていた。

「おほん！おいアレク私より先になんてずるいぞ！」

「おっと、失礼しました父上。ですがこれくらいいいではありませんせんか…ね、ティア？」

ティアは少し恥ずかしそうに頷いた。

ルークはついに俯いてしまった。

「へ、陛下…」

ルルーは、そんなルークの様子に苦笑いを浮かべる事しかできなかった。

その頃、エリエルは扉の前に立っていた。

（うう…あの兄上が心配している？怒っているの間違いだろう…）

そう思いながら立っていた。すると中から声がした。

「エリエル、そこに突っ立ってないで早く入れ」

「うっ……」

エリエルは恐る恐る扉を開けた。部屋の中には、すぐ目の前に机があり隅にはいろんな書類が山になっていた。

「やっと来たか」

そして目の前の机に座っている人物の名はドウウラ・レルス・スクワード、王宮騎士団の副団長であり次期スクワード公爵当主であり、エリエルの兄だった。

「で、何ですか兄上」

「ああ、怪我がなくて安心した……」

「……ご迷惑お掛けしてすみませんでした」

「いや、責めている訳じゃないさ、今回の敵は色々と厄介だからな……気を付けてくれ」

「……はい。分かりました」

エリエルはしっかり頷いた。ドウウラも頷いた。

ティアの意外な場面（後書き）

うーん…

最後が何か微妙ですが。

なんとか書けました。

また、更新するのは結構おそいかもしれませんが
どうぞよろしく願います。

あ、コメントなどもよろしく願います。

王女ミナージュと第1王女キアラ（前書き）

遅れてすみません。

王女ミナージュと第1王女キアラ

「王妃様とキアラ様に会うの？」

ルルーは少し悩んでいた。

それは、ティアの一言から始まった。

「キアラ姉様に会う…か」

「？…どうしたのティア？」

ティアが何か考えているのに気が付いたルルーはティアに声をかけた。

「…ルルー」

「何？」

「貴方もキアラ姉様に会いに行くわよ」

一瞬だけ空気が静かになった。

「えええ！！」

ルルーは驚きのあまり大声を出してしまった。慌ててルルーの口元を手で押さえた。

「…そんなに驚く事はないでしょう…」

ティアは少し固まり気味のルルーに苦笑いを浮かべることしかできなかった。

その途端、ずっと黙っていたアレクが口を開いた。

「そうですね、ルルー殿も会っていた方が後々楽ですし、それと母上にも会わないと」

「ああ…そういうえはお母様にも会わないといけないわね」

話を先に進める兄妹にルルーは黙って聞くことしかできなかった。

そして今に至る。

「うう…緊張する」

「そんなに畏まらなくてもいい気がするけど…」

歩きが硬いルルーにティアは頭の上に？マークが付きそうな様子だった。そして2人はキアラの部屋に到着した。

ティアがノックすると部屋の中から声がした。

「失礼します」

部屋の中には2人いた。1人はティアを見た瞬間目が輝いた。もう1人は泣きそうな顔をしている。

「…今回の事件では心配をお掛けしてすみませんでした、お母様、キアラ姉様。」

ティアがお辞儀をするとさっきまで目を輝かせていた人…第1王女であるキアラがティアに飛びついた。

「んもう！本当に心配したのよ！」

「…ごめんなさいキアラ姉様」

キアラはティアの言葉に子供のような笑顔になった。

「ティア」

抱き合っている姉妹の側に王妃であるミラージュが来た。

「信じていたわよティア、貴方は私の血を濃く引き継いでいる者これくらい大丈夫わよね？」

そしてミラージュはティアの頭に手を乗せた。

そんな親子3人をルルーはうれしそうに見つめていた。

会議

王宮の奥にある会議室には今から会議が行われようとしている。その中にはルルーとティアの姿もあった。

「これより、国王陛下暗殺計画事件の会議を始めます。」

会議はルルーの父、ビレーシオ公爵大臣の声ではじまった。

「うむ、皆が知っている通り我は謎の暗殺者に殺されかけた。皆、心配をかけてすまないと思っている」

「ご無事で何よりです陛下」

他の大臣たちも陛下の生還にうれしく思っていた。ルルーも少し微笑んでいた。

「…ティアも、本当にありがとう」

「いえ、陛下を守るのが私のお役目ですから」

「これくらい『お父様』と呼んでもいいじゃないか…」

「今は仕事中です、後でしっかりお話を聞きますから我慢してください」

少しすねた様子のルークとそれを無視し続けるティアとの親子会話に、会議に参加している大臣達やルルーは

苦笑いを浮かべていた。だがそれは一瞬のことだった。

「我を殺そうとした奴らは2人、奴らは最後、森の奥に逃げ込んだということだ」

「森の奥…」と呟いてルルーはその2人の特徴を思い出していた。

「陛下、2人の特徴などは、まだ分かっているのではありませんか」

「ああ、まだ何も…ティアは何か見なかったか？」

ティアは目を閉じて思い出していたが首を横に振った。

会議室に沈黙が訪れた。

だが、それを壊したのはルルーだった。

「羽模様のついた長剣、氷魔法を駆使して氷魔法専用にした弓……」
ルルーのその声で父のダルトがルルーに声を掛けた。

「何か思い出したのかルルー」

ルルーは頷きルークを見た。

「陛下、陛下を殺そうとした2人の内、1人は羽模様のついた長剣を持っていました、そしてもう1人は氷魔法専用の弓を使っていました。ティアに怪我をさせた奴はおそらく、長剣の人かと思います。あの短剣にも羽模様が書いてありましたから……」

ルルーの言葉にルークを始め、大臣たちも驚いていた。そしてティアが何かを思い出した様な顔になった。

「学園の近くの森……あそこ森の奥には……確か……」

何かを呟いていたティアがルルーの顔、そしてルークの顔を見た。

「ルルー、前に先生が森の奥には何かがあると言っていたわよね」

「う・うん……確か……！？……まさか！」

「そのまさかよ……陛下、いえお父様、そしてビレーシオ公爵大臣、あなた方も知っているはずです。あの奥には建物があることを、そしてその建物は……」

そこでダルトとルークも思い出した。

「地下通路へ行く階段がある……」

「そしてその通路を歩いていくと……学園長室に……」

ダルトとルークは顔を見合わせた。

「まさか陛下、アイツが……」

「そんなわけ！」

ルークが「そんなわけがない」と言おうとしたときに、突然ティアの後ろに陰が下りた。

そして陰の言葉を聴いたティアはルークとダルトを見て首を横に振

った。

「…犯人を捕まえました。名前は…リンク・ブエス・ルイロス、そしてリーナ・スヒイク・ルイロスです」

「え…ルイロス先生！」

リーナ・スヒイク・ルイロス、彼女はルルーとティアの担任教師であつた。

「リンクが…」

「そうか…リア、ご苦労だつた」

陰…リアは音もなく消えていった。

会議室は再び沈黙になつた。

廊下で

ルルー達は地下にある牢屋をめざして長い廊下をあるいていた。

ルルーの隣にはティア、ルークの隣にはダルトがいた。

（なんで学園長と先生が…）

ルルーはそう思いながら歩いていた。

「ルルー、大丈夫？」

ティアはそんなルルーを心配して声を掛けた。

「大丈夫…ティアは平気なの？」

「私は…慣れているから、慣れてはいけないのに慣れてしまったから…だから大丈夫」

そう言つて少し寂しそうにティアは笑った。

ルルー達がそんな話をしている最中、ルークとダルトはショックを隠せないままだった。

「陛下…いえ、ルーク、なぜリンクが…」

「…俺にも分からない…リンクだからな…」

2人は親友であるリンクがなぜこのような事をしたのかが気になつてどうしようもなかった。

そして、ついに牢屋の扉の前に着いた。

牢屋の中には強い魔力が充満しているのを感じる…。

そして、牢屋の扉が開いた。

牢屋の中にいるのは笑顔を見せて余裕な感じのリーナ、そして待ちに待った、という表情をしてるリンクがいた。

廊下で（後書き）

今回は短めです。

誤字、脱字があつたらお知らせください。

悪と善（前書き）

タイトルは気にしないでください。

悪と善

牢屋の中にはエルセント学園の学園長、リンクと教師であるリーナがいた。

「やっと来ましたか。遅いですよルーク、ダルト。」

リンクは自分が牢屋に入っているにも関わらず余裕の表情で話した。

「リンク…お前！どうして！」

「どうしてって…少し落ち着いたらどうですかダルト？」

口を開こうとしたダルトだがルークの手によってダルトは口を閉じた。

「リンク、俺を殺そうとしたのは自らなのか、それとも命令なのか…」

「そんなの教えられませんよ…教えたらゲームは負けなんです。」

「ゲーム？」

「そう、これはゲームなんです。誰が早く国王陛下を傷つけられるか、というゲームです。ああ、一応言っておきますが私達の他にも貴方を殺しに来るかもしれませんよ？これは敗者からのアドバイスです」

ルークは目を閉じた。

「学園長…先生…」

ルルーは少し泣きそうな顔になっていた。

「ルルーさん、そんな泣きそうな顔をしないでください…貴方は笑顔が一番良く似合うのです。…陛下を暗殺しようとしたのは事実なのです…その事実を受け止めてください。」

リーナは微笑んだ。ルルーは「はい…」と言い微笑んだ。だがダルトは複雑な顔で見ていた。

ティアは隅で今までの光景を見ていた。牢屋では誰も話しをしないため、静かになった。すると、目を閉じていたルークが無言で牢屋を出て行った。それに続いてダルト、ルルーも牢屋から出て行った。

そしてティアだけが残った。

「あら？ティアさんは戻らないの？」

「はい…もう少し御2人と話したいですから」

そう言ってティアは真ん中に立った。

「学園長達を手駒にした人は『彼』ですか？」

「ああ、そのとおり『彼』が私達駒を動かした主だよ」

ティアの瞳に陰が蠢いた。

「『彼』はまたも私の邪魔をするのですか…」

「仕方ないわ、『彼』なんだもの…いつでもティアさんの前に壁となつて立ちはだかるわ」

沈黙が訪れた…。誰も声を発しない牢屋の中は闇だった。

「…私はそろつとお父様の元へ戻ります。あなた方もご苦労様でした」

「いえ、私達はここで十分に償うことにしますよ…」

「私も、クラスの生徒として、この国の姫君として役目をはたせてうれしく思います。貴方様も十分に置きお付けてください。」

そしてティアも牢屋から出た。

悪と善（後書き）

短くてすいません。

パートナー

（さて、いい情報を得られたことだし…どうしようかしら）
ティアは廊下を歩いていった。

表では庶民なのになぜ普通に廊下を歩けるのか、王宮は王族はもちろんだ大臣、王宮騎士、王宮侍女しか入れないためティアは普通に王宮に出入りができるのだ。だが、出入りは正面から目立つので裏口から入っている。結構大変なことだが王宮に入れるだけでもティアは満足していた。

「ティア様」

考え事をしながら歩いていたティアに隅から声を掛けられた。声を掛けたのはティアの専属侍女のカーラだった。

「どうしたのカーラ？」

「先ほど、アリア様が帰ってまいりました。」

「そう、アリアが戻ってきたのね」

「はい、只今ティア様のお部屋で待っているかと」

「分かった、ありがとうカーラ…また後でね」

「はいまた後で」

そう言っただけで笑ったカーラにティアも笑った。そしてパートナーに会いに急いで自分の部屋に戻った。

「ティアー！会いたかったよー！」

ティアが部屋に入った途端にいきなり誰かが抱きついてきた。

「たったの1日だけだったじゃない」

ティアは抱きついてきた誰か…アリアに呆れた様に言った。

「1日は長いんだよ！」

「そうかしら？」

「そうなんだよー！」

そしてアリアはずっとティアに抱きついていた。

ノックがした。ティアが「どうぞ」と言いそれを合図に扉が開いた。

「失礼します。ティア姉様、お父様と呼んでおります。姉様のご学友も待っているので早めに来て欲しいとのことです。」

「分かった、ありがとうフィナ。」

ティアは妹のフィナに微笑むとフィナも微笑んだ。

「行ってらっしゃーい」

「何言っているの？貴方も来るのよ」

「ええ〜！」

「ふふ、アリアさんもいつてきてください」

「フィナまで〜！」

「ということで、行くわよ」

「ウワアア……………。(。、。、)……………ン！！！！」

「いつてらっしゃいませ」

そしてティアは泣き叫ぶアリアを連れてルークのもとへ急いだ。

パートナー（後書き）

短めですいません。

ティアは怖い…（前書き）

人は怒らせると怖いですよー…

ティアは怖い…

（学園、今頃どうなっているのかな…エレナとマリアは大丈夫かな…）

ルルーは父であるダルトと国王であるルークとでティアを待っていた。

「ルルー？大丈夫か？」

「大丈夫ですお父様：只、学園の方が心配なのです…」

そう言って俯いてしまったルルーにダルトは心配していた。

「学園の方は大丈夫であろう、円卓騎士が行っているからな」

「そうだ、お前の親友も大丈夫だよ：安心しなさい」

ノックが聞こえた。

「陛下、遅くなってすみませんでした」

ティアとアリアが部屋に入ってきた。

「ティア：ここにはその他に誰もいないぞ、普通にしている良い」

「：分かりましたお父様」

ティアが頷くのを見てルルーは後ろに立つ人が気になっていた。

（：すごく綺麗な人、銀色の髪がすごく似合う）

ルルーが見惚れていると綺麗な人：アリアと目が合った。

（うひょゝ金色の瞳と目が合った！）

アリアは目が合ったルルーにキラッ、とウィンクをした。

（うひゃゝ！！）

頭の中がだいパニックのルルーにアリアはクスリ、と笑った。それにティアが気が付いた。

「ルルー紹介するわ、彼女はアリア、今は人間の姿をしているけど本当の姿は狼よ」

「ええ！狼なの！？」

ルルーの驚き様にアリアは大爆笑していた。

「あはははは、そんなに驚かなくてもいいじゃん！！あは、あははは！」

今だに笑っているアリアにティアは冷ややかな目で見つめていた。

その目でアリアが青ざめた。

「アリア、後で少しお話をしないとね」

万遍な笑みの周りに浮き立つ黒い気配がアリアを恐怖に貶めた。

「すみませんでしたー！！！！お願いだから許してください！！！！

！！本当に！！お願いです！！！！」

土下座をしながら謝るアリアにティアはこれでよし、と呟きながら許す気配がなかった。

その光景にルークとダリアは魔王降臨！！と心で叫び、ルルーはティアを怒らせてはいけない、と心で呟いた。

それから、アリアがティアを見るたび顔が青ざめるのであった。

白狼

今日もアリアはティアを見ると顔が青ざめていた。

「アリアさん：大丈夫ですか？」

「大丈夫なわけ無いでしょう」

「ですよね…」

ティアは本を手になかを書いていた。

「できた…」

ティアが呟くとルルー達に振り向いた。

「ルルー、アリア、少し北へ飛ぶわよ」

「えっ？」

二人が声を上げるまもなく目の前の景色が変わっていた。

「本当に北ね」

アリアは空を見上げた。

「アリアに頼みがあるの」

ティアはアリアを見た。その顔は真剣だった。

「ある物を探して欲しいの」

ある物の名を聞いたアリアは白狼になった。

「了解した。なるべく良い結果をもってくるね」

そしてアリアはその場から姿を消した。

「本当に白狼だったんだね…」

ルルーはアリアが姿を消した方を見つめた。

白狼（後書き）

短くてすいません・

お話

ルルーとティアは北の大陸にそびえ立つ建物に入った。中は薄暗く、不気味だった。

「ティア、ここは？」

「北の教会、ラルドシア教会でございます」

答えたのは奥の部屋から出てきた人だった。姿からして神父だということが分かった。

「教会…ですか？」

（確かに、教会って感じなんだけど…）

神父はティアを見た。

「貴方様自らというのは初めての事と存じます」

「突然の訪問すいませんファミーダ神父」

神父は首を振った。

「いえ…さ、奥へどうぞ」

ルルー達が通されたのはさっき神父が出てきた部屋だった。

「さて、今日はティア様自ら…何の御用でしょうか。」

「今日は2つの事を報告に来ました。1つは王女として、2つ目は…最高責任者として…」

（最高責任者？）

ルルーはその言葉が少し気になったがティアが話始めたので聞くことに集中した。

「では、お話ください」

「国王である父が殺されかけました。幸い怪我も無く無事でした。そして…」

ティアは1回ルルーを見た。そしてまた神父を見た。

「私の隣にいるルルーの記憶力のお陰で暗殺者が判明、即捕らえま

した。捕らえた暗殺者は2名、2名とも学園の者でした。：正直に
言つと学園長と私達の担任の教師でした。只今暗殺者の長を探して
います。…ここまですが王女としてのご報告です。そして最後の報告

ガード・ベノムが脱走しました。

┐

ティアが言ったのはこの一言だけ、だがこの一言が部屋を凍らせた。それと同時に神父の目も変わった。

「ご命令は」

「直ちにカースド・ベノムを探しだしなさい、だが、まだ捕らえては駄目よ見つけたら1日体勢で監視。少し彼には働いてもらっわ…」

「了解いたしました王女殿下」

神父がそう言った瞬間わまりの陰がいつせいに消えた。

ルルーとティアは教会を出た。

ルルーは色々と頭が混乱していた。

お話（後書き）

更新おそくてすみません・・・。

悲しき唄

ルルーとティアは一面真っ白な大地を歩いていた。

（ガード・ベノムって誰なんだろう？脱走したって言うていたけど…）

ルルーは前を歩くティアを見ながら考えていた。

するとティアが立ち止まった。

「少し休みましょうか。さすがにずっと歩いているのはつらいでしょう？」

「確かに…少しつかれたかも」

ティアは魔法で火を付けた。

「ルルーはここで休んでいて？私は少し向こうの谷の近くまで行って居るから…何かあったらそこへ行きなさい、いいわね？」

ルルーは頷いた。ティアも頷き、歩き出した。

ルルーは周りを見回した。

（本当に北なのね、ここ…）

雪を見るのは初めてではないが、エルセント王国は中央に在り春夏秋冬の季節もある。だが、この北の大陸は一年中雪が降る。

そんなことをルルーが思っていると唄が聞こえてきた。

静かな唄、だがそこには悲しみがあった。

（行ってみよう）

ルルーは火を消し立ち上がった。そして唄が聞こえる方へと歩き出した。

ルルーがたどり着いた所は谷だった。
唄はまだ聞こえてくる。

ルルーが谷を歩いているとそこにはティアがいた。
（ティア？）

唄はティアが歌っていた。

（悲しい唄…）

ルルーはティアを見ながら唄を聴いた。

『あなたに罪はありませんか？』

あなたの罪は私の罪

私達を包み込む原罪からは誰も逃れることはできないのです。

願う事は罪ですか？

何も罪も無い人がたくさんいるのです

みんなの罪は私が背負いましょう

たくさんの罪を私が背負いましょう

それですべてが終われば

すべての幻くものがたり>が閉じれば』

ルルーはいつの間にか泣いていたのに気付いた。

私はこの唄を知っている。…そうだ、この唄は九年前の大戦争の時に作られた唄だ

ティアが振り向いた。泣いているルルーに微笑んだ。…しかしその笑みには悲しみが含まれていた。

「この唄は九年前の…エルセント王国とラスレティル王国との大戦争の時に作られた唄なの。当時丁度私があの地下から出た日、あの日から戦いが始まった。戦争のきっかけは私に宿っている絶望の力、絶望の力を封印していた…つまりは私を閉じ込めていたのを開放してしまったのがいけなかったの」

ルルーは驚いた。

「そんなの!？」

「私を閉じ込めて置くようにお父様に言ったのはラスレティル王国の国王なのよ。そして私が開放されたのを聞いてラスレティル国王は怒り、エルセント王国と敵対した…これが大戦争の始まり」

「ティア…」

ルルーはまた泣きそうになった、だが堪えた。

「大戦争のきっかけは私だと知ったとき私は罪を背負うことにした」
「!？」

「私の所為で始まった戦争で犯してしまった人々の罪を私がすべて背負うことにした。こんなことで人々の罪が赦されることが無いと分かっている…私は、私はくわたくしは>すべての罪を背負わなければならぬ。たとえこの身が朽ちようとしても、血に餓えても

…」

ルルーはティアに抱きついた。

「ルルー？」

「私は…ずっとティアの味方だよ？いつか…いつかきつと罰はやってくるよ？でも、その時は逃げないで？価値も真実も嘘も…すべて赦される日がきつと来るから」

ティアはルルーの頭を撫でた。

（もう少しこうしてあげましょう）

そう思いティアはルルーの頭をなで続けた。

空からは真っ白い雪がやさしく降っていた。

悲しき唄（後書き）

やっと更新できました。
遅くて本当にすいません。

ガースド・ベノム

「ねえティア、ガースド・ベノムって誰？」

「……彼は大罪人よ」

「大罪人？」

ティアは頷いた。

「この世には沢山の罪があるわ……彼はその中で一番大きな罪を犯した」

ルルーは息を呑んだ。

「大きな罪？」

「そう……その罪は、村殺し」

「村、殺し……」

「彼は1日で村人を殺し、一人で村を焼き尽くした……村人の数は83人、彼は1日で83人もの人々を殺した」

ルルーは口に手を当てた。

「そんな……」

「……彼はその3日後に捕まったの……その時の彼は死人のようだったらしいわ。……それからよ」

ティアの声が低くなった。

「それから？」

「それから……連続殺人事件が起こり始めた、ガースド・ベノムをはじめ、多くの者が捕らえられた……そしてこの連続事件の黒幕が分かった」

「黒幕？」

「この事件の黒幕はケイド・アネントという男よ彼はお父様の暗殺を考えていたみたいね……だからあの二人を使った」

ルルーは俯いた。

「先生……」

「まあ、彼の目的は私なんだろうけど」

ティアが呟いた。そしてティアは立った。

「そろつと行きましようか」

「…そうだね」

ティアとルルーは歩き出した。

（ケイド・アネントが再び邪魔をしてくる前に早くアレを手にしな
いとね…）

ティアはそう思いながら歩いた。

ガースド・ベノム（後書き）

なんか短くてすいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7501s/>

魔法学校エルセント学園の不思議姫

2012年1月8日22時51分発行